



2002年3月入職

いとうまゆみ  
伊藤真弓



## 技術もプロ意識も、日々高まっています

### 細かな目配りを欠かさない

いつもは笑顔なのに、表情が沈んでいる。いつもはスッと立っているのに、少し腰がひけている。ご利用者さまのそんな変化を察知したときには、すぐに「どうしましたか？」という声をかけています。気持ちが落ち込んでいるときには励まし、体調が良くないときには施設長やナースに報告を入れる。自分から訴えることができない方もいらっしゃるため、日頃から細かな目配りは欠かしません。休み明けは他のスタッフに前日の様子を確認するなど、お一人おひとりの近況を常に把握するように心がけています。

### 「いつも誰かに見られている」という意識を



エキスパートケアワーカーの候補に選ばれたときは、1期生として自分が適しているのかがとても不安でした。研修がはじまってからは、その不安が的中。いつも通りの自分で大丈夫だと思っていたのですが、ロールプレイングでは講師からの指摘の連続でした。具体例を1つ挙げると、挨拶のときの分離礼。これは、挨拶とお辞儀を分けて行うという作法なのですが、私はずっとその2つを一緒に行っていたため、なかなか癖が抜けません。ですから研修中はもちろん、普段ご利用者さまに接するときも

常に分離礼を意識するようになりました。

日々意識していたせいか、分離礼は少しずつ体に馴染み、研修中に褒められることも多くなってきました。今では、自然に体が分離礼を行うようになっています。こういった技術的な部分はもちろん、この仕事への向き合い方を見つめ直す意味でも、候補に選ばれたことはプラスになりました。プロとしての自覚もより芽生えましたし、今は「いつも誰かに見られている」というまわりからの目線を意識しながら業務に取り組んでいます。これまでの経験、そして研修で培ったことを精一杯発揮しながら、「この施設で本当によかった」とご利用者さまに思っただけのケアを提供していきたいですね。



ご利用者さまに  
笑顔と安心を与えられる  
ケアワーカーになりたい。  
伊藤真弓